イザヤ書　第49章　９節

「わたしは捕らわれ人には『出よ』と言い、やみの中にいる者には『姿を現わせ』と言う。」

使徒の働き第３章に記されている「生まれつきの足なえ」に思いを馳せる。

当時、病や障害は罪の結果であるというのが常識であっただろう。ヨハネの福音書第９章では弟子たちでさえそう言っている。この「生まれつきの足なえ」は周囲からそう言われ続けていたのではないか。そしてこの人の親も、さらにこの人自身もそう思っていたかもしれない。罪の結果であると周りから責め続けられ、自分自身をも責める。足に障がいがあるだけなら生活の糧を得るための何らかの仕事も出来たかもしれないのに、罪人であるという理由でどこからも忌み嫌われ、雇ってもらえなかったのかもしれない。自分自身を諦め、自分は何もできない、だから施しを受けて生きるしかないと思ったかもしれない。それを長年続けてきた結果、その生活に慣れ、甘んじていたのかもしれない。宮に入ろうとするペテロとヨハネへの彼のまなざしもそういうまなざしであったのかもしれない。

しかし、彼はペテロとヨハネを通して呼びかけた主イエスの声を聴いた。

社会が捨て、親が捨て、そして自らを捨てたとしても決して見捨てない方がおられる。むしろそういう人に向かって主イエスは語る。「出ておいで」と。「恐れることはない。私が共にある。だから出ておいで。一緒に歩もう」と語りかけ、誘（いざな）っておられる。

恐れ、怯え、縮こまってしまっている者に対して、主イエスはいつもこう語り続けておられる。